

2020.12.24 説教  
クリスマス・イブ

「神の子」

マタイ 2 章 1-11

2:1 イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、

2:2 言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」

2:3 これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。

2:4 王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。

2:5 彼らは言った。「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

2:6 『ユダの地、ベツレヘムよ、／お前はユダの指導者たちの中で／決していちばん小さいものではない。お前から指導者が現れ、／わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

2:7 そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。

2:8 そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせしてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。

2:9 彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。

2:10 学者たちはその星を見て喜びにあふれた。

2:11 家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。

「私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とがあなたがたにあるように。」

クリスマス、おめでとうございます。

「クリスマス」とは、「キリストの祭り」という意味です。神の御子、イエス様の誕生の祝いです。御子の誕生と人類の救いの訪れという意味を込めて、「おめでとうございます」と挨拶を交わす習慣があります。

ちなみに「メリー・クリスマス」と言いますが、この「メリー」という言葉は、「うれしい」とか「楽しい」を表す言葉です。

今年のクリスマス・イブ礼拝では、聖書の伝えるクリスマス物語の中から、イエス様の誕生を祝いに訪れたという博士たちについてお話しします。

彼らは星の研究をしている博士たちでした。聖書のお話には何人とも書かれてはいませんが、伝説では 3 人と伝えられています。しかも、その 3 人には名前まで付けられているのです。

- 1) メルキオール（黄金。王権の象徴、青年の姿）
- 2) バルタザール（乳香。神性の象徴、壮年の姿）
- 3) カスパール（没薬。将来の受難である死の象徴、老人の姿）

また、この 3 人は 3 つの大陸の象徴でもあると伝えられます。それは、アジア、アフリカ、ヨーロッパ。そして、黒人、黄色人、白人を代表する者たちでもあると言われます。

伝説の意図するところは、すべての国民、すべての人種がイエス様の誕生を祝うために集うことでありましょう。

さて、神の子・イエス様の誕生の舞台は都エルサレムの近郊、ベツレヘムという村里です。

この小さな町に、遠い東の国から博士たちが訪ねて来たと伝えられています。

博士たちの旅は、気楽な「GO TO」というわけにはいきません。星の研究、すなわち突如現れた不思議な星の意味を探求することから始まります。研究が示すものは「ユダヤの新しい王の誕生」でありました。

博士たちは新しい王に謁見するためと、自分たちの研究の成果を確かめるべく、さっそく準備をし、砂漠や山を越えての旅が始まります。

ようやくエルサレムまでたどり着くころ、彼らは導いてくれた星を見失います。そこで、新しい王の誕生であるから王宮を訪ねるのですが、そこは場違いの雰囲気でありました。

時の王・ヘロデに謁見し、事の次第を伝えると、ヘロデは側近の学者たちを集め、メシアすなわち救い主誕生の預言を確かめます。

すると、学者たちはとまどうことなく、ためらわず答えます。「ユダヤのベツレヘムです」と。

ヘロデも「わたしも行って拝もう」と言うが、これは自分の利益を守るための企みからでありました。

聖書が伝えるクリスマスの物語は2つ。イエス様誕生の祝いに駆けつけた登場人物は、今日お読みしましたマタイによる福音書では、外国の博士たちだけです。

もう一つのルカによる福音書では、天使のお告げによってメシア誕生を知らされた羊飼いたちだけ。

他には誰もいない。ユダヤ社会では、羊飼いたちはさげすまれていましたし、外国人との関わりは絶たれていました。そのように、ユダヤから排除された者たちだけが祝いに訪れています。一般民衆はどうしたのか。どこにいたのか。なぜ来ないのか。

ユダヤの人々はメシア誕生を知らなかったのではありません。事実、道に迷った外国からの博士たちに場所を教えたのはユダヤ人たち自身なのです。ユダヤの学者をはじめ民衆たちは、預言者たちが命懸けで伝えたメシア誕生の知らせを忘れてはいませんでした。

しかし、知ってはいましたが、しなかったのです。

博士たちにとっても簡単な旅ではなかったでしょう。幾多の艱難を乗り越えて到着したのです。遠い国、長い距離以上に、博士たちがやり遂げなければならなかったのは、らくだの高い背から降り、ユダヤの新しい王の前にひざまずくという姿勢です。そのへりくだった行為を彼らはやり遂げたのです。

こうして、メシアは生まれました。マリアを通して、神の子・イエス様はお生まれになったのです。

「神の子」が生まれる。このことそのものを不思議に思われることでしょう。

神の子の誕生から始まったキリスト教ですが、聖書はさらにメッセージを伝えています。最後に、もう一箇所、聖書の言葉をご紹介します。

ヨハネによる福音書 1 章 12 節の言葉です。

「しかし、言（ことば）は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資格を与えた」と伝えられています。

キリスト教は人間を神に近づける手段ではありません。神から人間に近づき、御子として生まれ、寄り添うという知らせです。

神の子が生まれるという不思議と驚きだけでなく、神を信じること、人間が互いに尊び合うことを通して、神は信じる者たちを神の子とする、と言うのです。

御子の誕生、それは神ご自身が人間の親となる覚悟のしるしでもあるのです。

こうして私たちは、父なる神様、あるいは親なる神様と祈るのです。

「望みの神が、信仰からくるあらゆる喜びと平安とをあなたがたに満たし、聖霊の力によって、あなたがたを望みに溢れさせてくださいます」